

D. H. ロレンスの作品と宗教観

D.H. LAWRENCE'S WORKS AND HIS RELIGIOUS VIEW

修士課程 英文学専攻修了

加 藤 正 明

MASAAKI KATO

あなたのキリスト教信仰は、小説家としてのあなたを困惑させたか、それともあなたを豊かにしてくれたか、という質問を受けたら、F・モーリャックは次のように答えるという。「私の信仰は私を豊かにしてくれたし、また困らせましたのです。」「われわれは自分が書くものに無限をつつみこむわけですが、神はわれわれの書くものに何の重要性もお認めにならぬことを、今の私は知っています。神がそれを利用なさるのです。』¹⁾

スイスの博学な歴史家、シスモンディ (Sismondi) が若い頃、カトリック教の施設、それに結びついている種々の信仰を攻撃した時、賢い婦人であったシスモンディの母は息子に戒める意味で手紙を書いた。サント・ブウヴはこの手紙をルナンの『イエス伝』を批評する中で次のように引用している。

「人の幸福の基礎ともなっている意見を、益もないのに攻撃すると、人々から憎まれるということは、さして驚くに当らないことです。人々の意見は間違っているかも知れません。けれどもずっと以前から受け容れられている間違いは、私たちがそれに取って代らせようとする間違いよりも尊ぶべきなのです。だって一般に採用されている宗教制度を打ち倒した暁に見いだされるものは真理ではありませんからね。もとよりこの真理というものは、啓示されるのでなければ、人間の精神では測り知れない闇の中に隠れるものだからです。聖三位一体とか、童貞、聖マリアだとか、諸聖人だとかはそっとしておきなさい。この教義に執着している人々の大部分にとっては、それらの物は建物の全体を支える柱なのです。……信心というものは魂の感情の中でも最も楽しく、魂の安息に最も必要な感情の一つなのです。どんな宗教においてもこうした感情が味わわれるに違いありません。』²⁾

サント・ブウヴは神を信じる者と信じない者とのあいだには、決断力がなくて、決してどちらにもつかない多数の浮動する大衆がいて、ルナンが信頼して呼びかけたのは、この多数の大衆であった、と説明する。そして、超自然的なものや奇蹟を認める人々と、これを認めない人々とのあいだには、議論の余地はない。認めるか認めないかの二つに一つである。両者はいつまでも論争することは出来るが、互いに相手を説き伏せようと望むべきではない、と結論する³⁾。

しかし、人が、信じようが信じまいが、疑念をもとうが拒絶しようが、そういうことに左右されず

に神は存在するというのが信者の見方であろう。またキリスト教の目標が個人個人が救われるだけでなく、救われた者同士が相互に愛しあい、神の国を拡張していくことにあるとすれば、互いに相手を説き伏せようとする要請も程度の差こそあれ当然出てくると思われる。

「イエスの根本思想は初めから神の国の建設であった。しかし、この神の国をイエスはじつに多様な意味に解していた。」⁴⁾ イエスは過度に激しい気質のために絶えず人間性の限界から外へ出た。彼のわざは理性のわざではなかった。そうして人間精神のあらゆる規準を軽んじつつ、この上なく命令的に要求したものは「信仰」であったという⁵⁾。

この小論では、D.H. ロレンスの作品を通して、宗教観がその中でどのように表現されているかを検討しようとするものである。

『虹』 *The Rainbow* の中でアーシュラのキリスト教観が書かれている。

‘Jesus died for me, He suffered for me.’

彼女はこの言葉に初めは、プライドとスリルを感じるのだが、すぐさま dreariness (荒涼とした) 気持になる⁶⁾。

マタイ伝、第 19 章第 24 節にある、

‘It is easier for a camel to go through the eye of a needle, than for a rich man to enter into heaven.’

をロレンスは引用し、アーシュラに批判させる。

日曜学校の先生たちの説明に彼女はあきたらない。彼らが説明する針の穴の天国へは彼女は行きたくない⁷⁾。

キリストの復活については、次のように述べている。

「あゝ、死んだ肉体の復活などなんになる？ そして、あの『昇天』もだ！」

Alas, that so soon the drama is over; that life is ended at thirty-three; that the half of the year of the soul is cold and historyless! Alas, that a risen Christ has no place with us! Alas, that the memory of the passion of Sorrow and Death and the Grave holds triumph over the pale fact of Resurrection!

何故、自分は完全な肉体をもって強い生命に輝きながら、よみがえることができないのか？
マリアが叫んだとき、

‘shall I not take her in my arms, and kiss her and hold her to my breast? Why is the risen body deadly, and abhorrent with wounds?’

「復活」は生への復活であり、死への復活ではないのだ。よみがえったものが身も心も完全な人間として、私たちの間を歩くのを見ることはできないのだろうか？

‘glad in the flesh, living in the flesh, loving in the flesh, begetting children in the flesh,’

この表現は、よみがえったキリストが、「死」と「十字架」の影におびえていず、「肉体」をもったキリストの復活を希求したものである⁹⁾。

『虹』におけるアーシュラにとって宗教は、初めは別世界であった。五千人の人間にパンを裂き与えたあの輝かしい世界も彼女には現実性を失っていた。それは一場のお伽噺、神話、幻になっている。真の歴史的事実であると言われても、それが嘘であることは彼女にはわかってしまった。五千人に食べさせることなどあり得ぬと彼女は思う。彼女の結論は、日常生活で経験できぬ事柄がどうしてわたしたちにとって真実でありうるか、ということである。

マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝にある

‘Sell that thou hast, and give to the poor.’

をロレンスは引用し⁹⁾、アーシュラに意見を述べさせる。彼女は聖書の言葉を実行する気になれない。貧しき者に施して、自分が本当に貧乏になるのを彼女は嫌う。

ロレンスは『アポカリプス』*Apocalypse*の中で、仏教、キリスト教、あるいはプラトン哲学という諦念の宗教は貴族のいわば精神的貴族の宗教である。精神上の貴族は自我実現と他者への奉仕のうちに己れの義務の遂行を見る。「貧しい者に仕えよ」というが、誠に結構であるが、しかし、貧しいものは一体誰に仕えたらよいのか、と疑問をなげかける¹⁰⁾。更に、あなたの隣人を愛するというキリスト教的方法 (Christ's way of loving your neighbour) は最終的には、あなたの隣人とあくまでも敵対しあって生きねばならないいまわしい変則にあなたを導くのだ、とロレンスは言う¹¹⁾。エドワード・ガーネット宛の手紙には次のように書いている。

「われわれは隣人というその言葉を愛するのであって隣人の肉体を愛するのではない。というのは、かの肉体なるものは、われわれの隣人ではなくて、天にまします永久にわれわれの知ることのできない父なるものだからである。……そこでわれわれが隣人を愛するとき、われわれは隣人という言葉を受取るのであり、そして、われわれは隣人という虚偽を憎み、隣人とは歪曲にすぎないのである。」¹²⁾

慈愛とは言葉のみの持つもので、肉体は持たないものだからだ、とロレンスは説明する¹³⁾。『息子と恋人』*Sons and Lovers*の中のミリアムの母親は「なんじの頬を打つ者には他の頬も向けよ」の教義に固執していたが、ミリアムはそれに従い、アガサや男の子たちはそれがいやでたまらなかった。前述のアーシュラは「もう一方の頬を向ける」とは出来ない。彼女は過去の体験によって自分にはこの教義の実行は不可能であると言う。作者はこゝでは、キリスト教信者の立場からアーシュラに批判させていない。キリストは霊の答えを求めて語っているのに対し、彼女は週日世界の事実から語っている。作者はアーシュラをその点においては裏切りだと説明する。彼女はアントンをアダムと比較する。アントンはアダムの子ではないと言う。アダムは、故郷楽園から追放されて、それ以来、人類は自己を求めて歩いている乞食にすぎぬから、アントンよりも卑屈だという¹⁴⁾。アーシュラの知っていた宗教は、すべての人間の憧憬を包む一種の衣裳にすぎないことを彼女は理解する。憧憬は真物であ

り、衣裳は国民的な好みや必要が生んだものであると彼女は思う。作者はそのあと、アーシュラと、宗教を完全に人間化していた女、ウィニフレッドの見解を述べてから次のように続けている。

‘The Greeks had a naked Apollo, the Christians a white-robed Christ, the Buddhists a royal prince, the Egyptians their Osiris.’¹⁵⁾

ロレンスは、信仰そのものが普遍なのであり、複数の宗教はすべて地方的なものであること、キリスト教といえども結局は地方的な分派にすぎぬ、と言う。多くの地方的宗教がまだ一つの普遍宗教に同化帰一するところまでは行っていない、と『虹』では書かれている¹⁶⁾。また、恐れと愛が宗教の二つの大きな動機であること、キリスト教は恐れからのがれるために十字架を受け入れた。しかし、恐れられるもの必ずしもすべて悪とは限らぬし、また愛されるもの必ずしもすべて善とも限らない。恐れはやがて尊敬になり、尊敬は同時に服従でもあり得る。また

‘love shall become triumph, and triumph is delight in identification’

でもあるからだと言う。

作品の中で言うロレンスの「信仰」そのものが普遍なのだという言葉は深く考えさせるものがある。複数の宗教があるという事実。ロレンスはこゝで個人における「信仰の自由」とは別に、宗教の多様性を述べているように思えるのである。「正しさ」というものは多様なものに思えるからである。世界にある複数の宗教における関係が考えられるのだ。例えば世界三大宗教のひとつであるキリスト教が直面している新しい課題は他の諸宗教への態度をいかに決定していくかという点にあり、キリスト教の今後の運命はこれらの点をめぐる展開によって定められると言われる¹⁷⁾。

『息子と恋人』のモレル夫人はピュリタンであり、昔の恋人、ジョン・フィールドから与えられた聖書を末永く保存し、彼の思い出を守り続けた女である。自分の夫を軽蔑している彼女は夫に宗教を強いた。

His nature was purely sensuous, and she strove to make him moral, religious. She tried to force him to face things.¹⁸⁾

こゝではモレル夫人が信仰あつい自分を誇りに思っているのが感じられる。更に、ミリアムの場合は、キリストと神とは一体の偉大な人物であった。彼女の宗教的な強烈な心は彼女を日常生活から切り離している。切り離された世界は尼僧院の花園か天国のようなものである。そこでは罪と知恵とは存在しないか、存在しても醜く残酷なものとなる。『息子と恋人』は聖書からの引用が特に多いのが目立つ。信仰あつい者に対し、全く対照的と思われる人物を作者は登場させる。ポールは宗教に批判的である。彼は正統派の信仰個条に疑問をいだいている。不可知論に向かっている。神は霊的な存在ではないと彼は考える。神がものを知らないのは神自身がものだからと彼は考える。彼は自分を邪魔する信仰を全て捨ててしまう。そして徐々に己れの神を悟るだけの忍耐を持つべきだと考える。『死んだ男』*The Man Who Died* では、作者は強制はよくないことをその男に言わせる。

「わたしはひとびとに生きることを強いた、だからかれらはわたしに死を強いたのだ、強制というものはいつでもそうなる。」

‘I tried to compel them to live, so they compelled me to die. It is always so, with compulsion.....’²¹⁹⁾

この男が愛を全人類に強制したからだ。いかなる交際においてもその裏には相手を強制しようとする陰險な努力が隠されている、という。『息子と恋人』や『死んだ男』に対し、「洗礼式」‘The Christening’ という短篇では、神にすがるように祈る人間の姿が真摯に描かれる。末娘に父無し子が生れると彼女の父親は、その子の本当の父親は神だと、祈る。

‘The Child is Thine, he is Thy child. Lord, what father has a man but Thee? ...
...Lord, Thou art Father of this childt as is fatherless here.’²²⁰⁾

『息子と恋人』のミリアムも神に祈る姿は実に真摯である。ポールはミリアムの神の前では恥辱を感じないのに、人前で恥じるのを責める。イヴが恐縮して楽園を出て行く時に、罪を楽しむ気持ちをもっていたと説明する。

ロレンスは *Assorted Articles* の『甦れる主』の中で、偉大な宗教的映像というものは、われわれ自身の経験の映像、われわれ自身の精神や靈魂の実状の映像である、という。

妻も母も姉妹も、いかなる恋人も、戦場に出ていった男を砲弾から護ることは出来なかった、と言い、この事実は戦地から戻った男の胸中に残っていて、聖母に抱かれたキリストという映像をうち壊し、そのかわりに十字架にかけられたキリストをそこへ留めるようになった、と説明する。戦争を支配したプロテスタント教会が生活への信念と力とを持って、大きく一步進み、甦れるキリストを説くだけのことをしうとはロレンスには考えられないのである。『アポカリプス』では、アポカリプスは黙示録を意味するが、この黙示録は聖書全体を通じて最も魅力のないもの (the least attractive) と述べている²²¹⁾。彼は教会ないし日曜学校流の感じ方を嫌忌してやまない。人間は単なる〈忠実また真〉より以上のものであること、彼が青年の頃、E・スペンサーの『フェアリー・クイーン』*The Faerie Queene* を愛読したがスペンサーの寓意 (allegory) はいただけなかった、と書いてある。同時にバニヤンの『天路歷程』*Pilgrim's Progress* も読むに耐えなかった、という²²²⁾。

ロレンスによると生きた宗教は常に無教育な人々の間に深く根ざすということになる。強者の宗教は諦念と愛を教える。弱者の宗教は強き者、権力あるものを倒せ、そして貧しいものをして栄光あらしめよ、と教える。このアポカリプスは、キリスト教徒の大多数にとって一世紀以来、常に希望の最大の源泉となってきたと、ロレンスは考えている。そして、大多数とはいづの世においても第二流の輩の集まりであると解釈する。人は一人の時に初めてキリスト教徒たりうるといふ。他者と共に居るときは直ちに差別が生じるからだ。

Only when he is alone, can man be a Christian, a Buddhist, or Platonist..... When he is with other men, instantly distinction occurs, and levels are formed. As soon as he is with other men, Jesus is an aristocrat, a master.²²³⁾

ロレンスは、レーニン、リンカーン、ウィルソンを例にあげて、彼らも個人の状態を保っている。うちは真の聖者でありうる。しかし人間の集団的自我にひとたび手を触れると、あらゆる聖者が悪人と化

す、と述べる。だから偉大なる聖者とはただ個人のものであることを言う。イエスは個人の位置を保っていたという。弟子と一緒に居る時でさえ、イエスは彼らと交わらなかった。行動を共にしたこともなく、いつも孤独であった、と述べている。ルナンは「イエスはある意味で無政府論者である。彼はこの世について何の観念も持たないからである。」²⁴⁾と、書いている。

イエスの弟子となるには、書式への署名も、信仰の誓約も要らなかった、ただ一つのこと、彼を離れず彼を愛することだけが必要であった²⁵⁾。しかし、イエスは家族から愛されなかったようだ。時々、家族に対して厳しくあたった²⁶⁾。ルナンは同じ著書の中で「無知」と「貧困」について述べている。「無知ということは東方の社会状態においては、大事業、大独創のための条件であった。イエスは、仏陀、ゾロアストル、プラトンの名さえ知らなかったし、ギリシャの書も、仏教の経も一向読まなかった。けれども彼のうちには、彼は知らなかったが、仏教、ゾロアストル教、ギリシャ的教知などから来た要素が一つならず在る。偉大なる人間は、一方では彼の時代のすべてを受容れ、他方では彼の時代を支配する。」²⁷⁾ また「貧しい」(ébion)という語は「聖い」や「神の友」などと同義語となっていた²⁸⁾。

ロレンスの見方は、人間の本性は元来、聖なるものでないと見る。人の心は splendour, gorgeousness, pride, assumption, glory, lordship を求めていること、これらのものを人は love よりも少くとも bread よりも求めているのだ、という。古代異教徒の間では、倫理とは社会礼法であり、慎しみある行動作法にとどまっていた。ところがキリストの時代の頃までには、あらゆる宗教あらゆる思想が vitality, potency, power との古代的な崇拜と探究から転じて、death, death-rewards, death-penalties, morals の探究に変わってしまったようにロレンスは考えている。

古代の世界は全く宗教的であるが神をもっていなかったという事実がある。人間が相互に緊密な肉体的連帯感のうちに生きていた頃は、空とお鳥の群れのように堅い肉体的一体感に結ばれている。個人としては分離しがたい古代の部族連帯意識があった時代である。この時代の部族はコスモスと、胸と胸を相触れ、裸のままにコスモスと抱擁しあっていた。

the whole cosmos was alive and in contact with the flesh of man, there was no room for the intrusion of the God idea.

しかし、個人がみずから分離を始める。そして自我意識に落ち込む。The Tree of Life のかわりに the Tree of Knowledge を喰い自己の孤立と乖離を知ったとき初めて the conception of a God が生れ、人間とコスモスとの間に介入したのである²⁹⁾。ロレンスは要するにアポカリプスのキリスト教精神を嫌悪している。

Oh, it is the Christianity of the middling masses, this Christianity of the Apocalypse. And we must confess, it is hideous. Self-righteousness, self-conceit, self-importance and secret envy underlie it all.

人間が最も激しく希求するものは、生ける完全性である。魂の孤立した救いではない。肉体的充足を求めること、人間は肉のうちに生き、性的能力があることだ。そして

For man, as for flower and beast and bird, the supreme triumph is to be most vividly,
most perfectly alive.³⁰⁾

生まれざる者、死せるものが何を知っていようと、肉の中に生きている驚異は知らない。死者が見張るのは後生のことだ。

I am part of the sun as my eye is part of me. That I am part of the earth my feet
know perfectly, and my blood is part of the sea.³¹⁾

ロレンスは更に強調する。私たちが欲するものは

‘to destroy our false, inorganic connections especially those related to money, and re-
establish the living organic connections, with cosmos, the sun and earth, with mankind
and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen.’³²⁾

Horace Gregory は、『アポカリプス』を批評する中で「この作品は死を強く意識して書かれたことは信じるにたたくない。『アポカリプス』は his will and testament である。……この作品の最初の数ページが a return to Nottinghamshire, to the church of Lawrence's boyhood であることは意義深い。それは a last long journey home である。……『アポカリプス』の最後の数ページを読むと、ロレンスが尊重した唯一の力は創造力であることを私たちは再び考えてみなければならない。」と書いている³³⁾。

『翼ある蛇』*The Plumed Serpent* では、イエスはメキシコ人にとっては救世主ではないことが書かれている。イエスはメキシコ人の墓に埋葬された死んだ神として考えられる。教会についてもキリスト教の普遍的教会としてでなく、マホメット、仏陀のケツアルコアトル (Quetzalcoatl) の、その他、種々の神による普遍的教会も考えられている。それは神は同一の神であっても人間は様々な言葉を話し、各自、母国語で話すそれぞれの予言者が必要だからだ。異なる人種がそれぞれ言語や皮膚の色を異にするように、異なる救世主を必要とするのは当然かもしれない。究極の神秘はただひとつのものであるが、そのあらわれ方は千差万物である。『翼ある蛇』について、Alastair Nivenは、「小説の最後で、ケツアルコアトルの宗教がキリスト教を退け、この宗教が国に採用された。」³⁴⁾ そして、かれは、「教会からキリスト教的なイメージを一掃すること、古代の宗教儀式を復活させること、これがロレンスが主な作品のテーマとして使う手法であるが、この作品もそうだ。それは単に無神論的偶像破壊主義的な問題ではない。ロレンスがすばやく感知したように通常のメキシコ・インディアンの本能がカトリック教よりも more pagan であったのだ。ロレンスは『翼ある蛇』では大衆運動の可能性を試みている。彼は『カンガルー』*Kangaroo* や『アーロンの杖』*Aaron's Rod* では大衆の政治行動を志したのであり、『翼ある蛇』では宗教にしたのである。」と書いている³⁵⁾。

ロレンスはエドワード・ガーネット宛の手紙の中で

「キリストは何ものであったのか、彼は言^{ことば}であり、あるいは言となったのである。彼のうちで何が残ったのか。キリストからはこの地上に何らかの肉体も残っていない。たぶん彼が手

で形づくった何かの大工仕事はどこかに彼の肉体の烙印を残しているだろう。」³⁶⁾

と書き、別の機会にガーネットに

「私は元来、情熱的に宗教的な人間なのです。そして私の小説は宗教的経験の深奥から書かれねばなりません。それを固守しなければなりません。何となれば、そのようにしてのみ、私は仕事をすることができるのです。」³⁷⁾

と書いている。

オットリーヌ・モレル夫人への手紙には、

「魂などは地獄に堕ちるがよい。人間の魂は、存在のすべて、目的のすべてではなく、万物の魂は神の肉体を形成しており、神は、実に存在を知っているが故に、人間はこの世にやってくるのです。」³⁸⁾と、書かれてある。

ロレンスの手紙をあと数通、どうしても引用せずにはいられない。手紙の内容が彼の宗教観と係わりがあるからだ。J.M. マリとキャサリン・マンスフィールド宛には、「僕は『白痴』が最も好きだ。白痴はキリスト教の最後の段階を示している。純粹没我たらんとする。純粹絶対意識に溶解せんとする最後の段階を自分が肉体を脱却し、宇宙はすなわち自己意識と化するほどかくも超越意識的になれたときこそ、キリスト教徒の恍惚境だ。これは白痴の小公子だ。それはキリスト教徒の小羊のように肉体を貪り食われる、意識超越、すなわち霊の恍惚である。」³⁹⁾と書き、「キリスト教はほんとうは反動の上に、否定の上に基礎を置いています。『すべての世間的欲望を棄てよ、そうして天国のために生きよ』とそれは言います。しかるに私はひとはその欲望を神聖に追究すべきだと言うのです。そうしてこれは最も深刻な欲望、すなわち外的な事物によって妨げられずに生きんとする欲望、純粹の関係と生きた真実に対する欲望の遂行を意味するのです。」⁴⁰⁾と書きおくったのは、キャサリン・カーズウェル宛の手紙であった。同じく「私はキリスト教徒ではありません。キリスト教は私には不十分です。私もまたひとは戦わねばならぬということを信ずるものです。」と書いている⁴¹⁾。

「人間は墮天使ではなく、ただの人間なのだ。けれども、ドストエフスキーは、すべての人間を神学的あるいは宗教的単位として用いたのだ。キリストの〈種播く者まかんとて出ず〉という言葉やバニヤンの『天路歷程』と同じくみな神学の言葉だ。悪芸術だ。虚偽の真理だ。」⁴²⁾

「私は仏陀を信じません」

Yet I don't believe in Buddha—hate him in fact—his rat-hole temples and his rat-hole religion. Better Jesus.⁴³⁾

最後に引用するのはドロシー・ブレット宛の二通である。

「あなたは性を精神的関係に入れようとしたことによって怖ろしい過ちを犯したのです。昔の尼僧や聖者たちはそんな過ちを犯したものです。でもそれがやがて腐敗の原因となったのです。」⁴⁴⁾

「キリストは深刻に惨澹たる害悪を後に残して、間違っていたと、私が思っていることを記

憶して下さい。』⁴⁵⁾

『死んだ男』の男は、自分が死刑に追いやられたのは、自分が説教をしたからであり、これが自分の犯した誤ちである、という。イエスが死刑に処せられた理由を『ヨハネ伝』に基づいて解釈するキリスト教社会運動家が日本にいた。死刑に処せられた理由は三つあり、

「第一の理由は、四十六年という長い年月をかけて建築されたエルサレムの神殿をさして、

汝らこの宮をこぼて。われ三日のあいだにこれを起さん、と言ったことである。

これは冒瀆罪である。第二の理由はイエスが人間でありながら、自分自身を神としたことである。これも冒瀆罪である。第三の理由は、ローマの総督ピラトに「汝は王なるか？」ときかれて、イエスが

われの王なることは、汝の言えるごとし。われはこれがために生まれ、これがために世にきたれり、と言ったことである。

。イエスはこれを精神的な意味で言ったのであるが、ローマ皇帝への叛逆と解釈され、叛逆罪が捏造されたのである。」

と書いてある⁴⁶⁾。しかし、ロレンスは『甦れる主』の中で、キリストの生涯という偉大な神秘において間違っているのはただ部分のみである、といっている。処女の出産、洗礼、誘惑、説教、ゲッセマネ (Gethsemane)、裏切り、十字架、埋葬と復活、これらのことはわれわれの内心の経験に照らしてみてもことごとく正しい、という。

「キリストは手も脚もある人間として甦ったのである。そしてもし彼が手や脚を持っていたならば、唇も胃も男性の生殖器官ももって甦ったのである。キリストは甦れり、しかも彼の肉体のすべてにおいて欠くところなく甦れり。』⁴⁷⁾

ロレンスによると肉と血は地上にのみ属しているものだと考える。甦ったキリストは地上の人間として他の人間と共に、偉大な肉体の生活をするためである。イエスが男性として肉と魂とをもって甦ったのであるなら、彼は一人の婦人を選び、彼女とともに生活し、彼女と二人で居るということである。従ってイエスは、自分の為したい世俗的な仕事をするために甦った、とロレンスは考えたいのだ。

『死んだ男』の男は、丘の上に立つイエルサレムの町に背をむけて、それとは反対の方向へ道をたどる。これは師としての自分、救世主としての自分は死ぬことによって、今度は自分のみの目的をもって世俗の世界へ現われようとしている。公的な生活ではなく私的な生活へ向かうのである。従って救世主が死んで甦ったのは新たな一人の男にすぎない。この男は一個人として、女の体とは交わることはできても女の心の底にひそむ考えや意識と交わることはできない。地上に肉体をもって甦ったこの男の発見は、肉体自身、生活をもつと同時に、それを越えたところにも広大な生活があるということである。その広大な世界は、与えるに無欲、受取るに無欲の世界である。

「もしわたしが生きた愛をもってユダに接吻していたならば、ユダもまた死の接吻をしてこなかったろう。ユダは肉をもって私を愛したのだと思う。それなのに、私は肉体を離れて、

愛の屍をもって愛するように求めていたのだ。」

If I had kissed Judas with live love, perhaps he would never have kissed me with death. Perhaps he loved me in the flesh, and I will that he should love me bodylessly, with the corpse of love—.⁴⁸⁾

『死んだ男』について次のように言う批評家がいる。この短篇小説はキリストについての物語であることは想像できるが、キリストまたはキリスト教のいずれか一方を批判するために書かれたものではない。Graham Hough はこの作品に芸術作品としての美があることを明示できずにいる。彼はロレンスがキリスト教の神託をいかに誤解しているか証明することばかりに気をとられている。Hough は、『死んだ男』がロレンスが書いたどの作品よりもキリスト教との和解にせまろうとしていると信じている⁴⁹⁾。Hough は「キリスト教的」価値を強調しているが、このことがロレンスの想像力をいかにせばめているか恐らく考えることもできないだろう。だから『死んだ男』を哲学的論文というよりも芸術的作品としてみるべきである。Hough が主張するようにキリスト教にもっとも近づくのではなく、ロレンスはあらゆる宗教の制約からすっかり離れてこれを芸術作品として書いているのである⁵⁰⁾。『死んだ男』において雄鶏は疑いもなく象徴である——終わりなき波、力、生の衝動の象徴である⁵¹⁾。

「歓びの幽霊たち」‘Glad Ghosts’では、一人で十字架にかけられたイエスにむかい、問うところがある。同時にはりつけにされた二人の盗人のこと、それが、イエスの妻と母親であったことを、イエスに問うところがある。

Oh, Jesus, didn't you know that you couldn't be crucified alone? —that the two thieves crucified along with you were the two women, your wife and your mother!

You called them two thieves.

But what would they call you, who had their women's bodies on the cross?

The abominable trinity on Calvary! ⁵²⁾

『虹』にでてくる英国国教の教義が、一切わからない登場人物がいる。神を一つの神秘として感じとる。大いなる神秘としての神である。暗い名状しがたい情緒ともいえる。宗教的感情に烈しい感動を覚えるが、宗教が牧師の口にかゝると空々しく虚像に聞える。教義の言葉の空しさに我慢できなくなる。善人になること、最善を尽すことは興味の無いことになる。出来合いの義務ではない自分自身の問題からくるもの、社会的義務でないものを重要視する。キリストの死骸を抱いているマリアの「嘆きの聖母」(Pietà) の絵像を眺めても反発して批判する。「傷だらけの死骸」を描いてそれを拝むことに対する反発なのである。雨水が葡萄酒に変わることをの意味も理解できない。

このように宗教を批判的に解釈する人物に対し、宗教を受け入れ信仰あつい人物も作品には登場する。しかし主人公が宗教に批判的なのが目立つ。前述の聖書からの引用について、例えば、雨水が葡萄酒に変わることを素直に信じる者の言葉は、「真実の奇蹟」を意味するという。ありのまゝに信じることが必要なのだという。ありのまゝとは「聖書」をありのまゝに信じることである。人の口を通

さないことである。聖書を一度も疑ったことがない者でも人からその教義を説かれると腹が立つ人物がいるのだ。

『恋する女たち』に登場するバーキンの親友である実業家のジェラルドは冬山で凍死したが、この世の実体は自分の立場と権威であり、愛と自己犠牲のキリスト教的な態度は古帽子にすぎない、と言った男である。ロレンスは多くの短篇小説を書いたがその中に‘The Old Adam’がある。原罪をテーマにする小説家は数多くいると思われる。この短篇小説におけるクライマックスは、そこに組み込まれた時間設定から考えると僅か4時間以内に起こる。しかも、日常茶飯事の中で起こる。原罪については「創世記」によると二人の眼が開け、自分たちが裸であることがわかったことで恥辱を知る。「隠す」という意識が働く。この作品においては「隠す」ものが明確でないのに罪を意識させる。Chaman Nahal は原罪について述べているが、彼の著書の中で、人生に対する問題の取り上げ方で、D.H. ロレンスと T.S. エリオットの間に大きな差異があるとすれば、と仮定し、キリスト教的な原罪の概念に対し、ロレンスはなんら意味をもたせていなかった、と書いている。そのあと、人が神の恩寵を失ったこと、何故、人が墮落し邪悪になったか、それは前述の「創世記」の中の文章と同様に、善悪を知る木の実を神に背いて食べたからだ、と述べ、それでは人間の罪とは正確にはどのような性質のものであるのか、結論をくだすのは難しい、伝統からいってこの善悪を知るとは、性欲に関係することだから、キリスト教史の中で堅く守られてきた性に対立するものだ、とつけ加えている⁹³⁾。

‘The Old Adam’で罪を意識させるところは、夜、夫が仕事から帰宅する前の描写である。彼の妻と下宿している青年とを一室に閉じ込めておく。34歳の人妻と27歳の若者である。時は夏の夜。行為が伴って起こる罪ではない。二人の心の微妙な動きの中に罪を意識させる。夫が帰宅するまで二人の間に何事も起こらない。しかし夫は帰ってから嫉妬を覚え、下宿人の青年も自分の存在を忘れて嫉妬を感じる。何故、作者は二人の男に嫉妬を感じさせたのだろうか？妻と青年とが夫の留守中に隠しごとをしたかも知れない、という疑念を夫にもたせたかったからである。青年が嫉妬を感じたのは、人妻との間に何事も起こらなかったからである。起こらなくとも「十戒」でいう姦淫が二人の心の中でおこなわれたのだ。この作品で誰よりも罪の深さを描写するのに成功している人物はこの女、トーマス夫人である。彼女は若者に対し翌日から態度を変えた。それまでは貞操について自分の心が動揺していたかのように。

行動にでなければ人は安全であると言えないのだ。行動を起こそうとする心の中に真理を裏切る一抹の良心の欠如が伴うとき、自由が剥奪されるという意味で不安が既に生じているのである。その点でやはり罪深いのである。この作品はそこを象徴的に描いている。そしてロレンスがこの作品の中で、トーマス夫人はプロテスタント教徒であり、この若者セヴァンはフランスの神学大学の出身でありカトリック教徒である、とことわって書いてあるのが誠に興味おかいのである。

『馬で去った女』*The Woman who Rode Away* では、夫が精神的にも肉体的にも現実的なものとならなかったために、女は去る。去ってから彼女は「白人の神」に飽きた、と言う。新しい土地で彼女は自己を意識することも性を意識することもないのを不思議に思う。白人女の鋭敏さや神経質な意

識もなくなる。無性格的な性と無性格的な情熱の巨大な流れの中に投げこまれる。

The sharpness and the quivering nervous consciousness of the highly-bred white woman was to be destroyed again, womanhood was to be cast once more into the great stream of impersonal sex and impersonal passion.⁵⁴⁾

この作品の中で土人は次のように言う。

‘White people know nothing. They are like children, always with toys.

We know the sun, and we know the moon.’⁵⁵⁾

そして、白人の女が土人たちの神に生贄となる時、土人たちの神々は新たな世界を創造し始め、白人の神々はこなごなに碎けてしまう、と言う。

Keith Sagar は『虹』の批評の中で、ロレンスの言葉を次のように引用している。

「私はキリスト教の偉大さは知っている。それは過去の偉大さである。私はまた知っている。もしも、初期のキリスト教徒たちがいなかったら、私たちは暗黒時代のあの混沌と絶望的の混乱から脱出してはいなかったであろう。

もし私が400年に生きていたなら、神に祈るか、私は本当の情熱的なクリスチャンになっていたと思う。現在は1924年だ。クリスチャンの冒険は終わった。この冒険はキリスト教から去った。私たちは神にむけて新しい冒険に出発しなければならない。』⁵⁶⁾

Chaman Nahal は次のように説明する。

ロレンスがキリスト教を批判する場合でも、実際にはキリスト教的な倫理 (ethics) を非難しているのではなく、キリスト教的信条 (dogma) を非難しているのである。

Alastair Niven は、

「ロレンスは、キリスト教が失敗したのは人間が罪深い誘惑に負けることによって失ったエデンの園を回復すべきであるという考えを仮定しているからだ、と信じた。信仰としては、キリスト教は、後向きには天国を見、前向きとしては復活を見ているが、現在の経験には絶対に満足しないのである。ケトサルコアトルの宗教はそれよりもずっと直接的な宗教であった。ロレンスが、特に擁護しようとしていることは、ある宗教を他のすべての宗教の上位におくことではなくて、世界の各地域はそこにふさわしい真の宗教を持つことである。『翼ある蛇』は特に精神的な復活をあつかった小説である。」

と、書いている⁵⁷⁾。

ロレンスの主なる長編小説においては、特に『息子と恋人』、『虹』、『恋する女たち』においては、聖書からの引用が頻繁になされている。そして、各登場人物に宗教論をたたかわせる時、上述したように主人公が現代の宗教に対し、特にキリスト教に対し批判的なものが目立つ。恰度、それは、ロレンスが現代文明に対し批判的であるのと非常によく似ているのである。一言でいうと、ロレンスが作品によく用いる「原始的自由」が現代文明の中に決して見出すことができないように、キリスト本来の精神を現代の教会組織の中に、彼の場合、先ず見出せるかどうか疑問をもち、結局、その不可能

性を感じとっていたような気がしてならない。

現在、世界に住む人間のうち、約65%がもろもろの宗教を信じている。しかも総信者数のうち、37%がキリスト教信者である。これはイスラム教徒、ヒンドウ教徒、仏教徒の数をはるかに上回っている。

ロレンス自身の「自分は宗教的な人間である」、「宗教は多様である」、「人は一人の時に初めてキリスト教徒たりうる」、「信仰そのものが普遍的なのである」という言葉は、宗教に係わりをもっていたと同時に、彼の特徴をよく表現していると思う。しかし、彼は、神学者としてではなく、作家、芸術家として宗教を考えていたのである。

〈注〉

- 1) マドレーヌ・シャプサル：『作者の声』=〈フランソワ・モーリャック〉、朝比奈誼訳、(晶文社、1973年) p. 94.
- 2) サンド・ブウヴ：『サンド・ブウヴ選集』十九世紀作家論(上)第四巻。辰野隆監修(実業之日本社、昭和25年) p. 309.
- 3) 同書：p. 320.
- 4) ルナン：『イエス伝』津田 穰訳(岩波書店、1976年) p. 244.
- 5) 同書：p. 278.
- 6) D.H. Lawrence: *The Rainbow* (Penguin Books, 1972) p. 274.
- 7) Ibid., p. 278.
- 8) Ibid., p. 281.
- 9) Ibid., p. 285.
- 10) D.H. Lawrence: *Apocalypse* (W. Heinemann Ltd., 1972) p. 14.
- 11) Ibid., p. 102.
- 12) D.H. ロレンス：A. ハックスレー編『D.H. ロレンスの手紙』伊藤整・永松定 訳(弥生書房、昭和46年) p. 88.
- 13) 同書：p. 89.
- 14) D.H. Lawrence: *The Rainbow* (Penguin Books, 1972) p. 292.
- 15) Ibid., p. 341.
- 16) Ibid., p. 342.
- 17) 岸本英夫：「世界の宗教」(大明堂、昭和40年) p. 97.
- 18) D.H. Lawrence: *Sons and Lovers* (Penguin Books, 1959) p. 23.
- 19) D.H. Lawrence: *Love Among the Haystacks and other stories* (Penguin Books, 1976) p. 142.
- 20) D.H. Lawrence: *The Collected Short Stories. Volume one* (William Heinemann, 1973) p. 280.
- 21) D.H. Lawrence: *Apocalypse* (W. Heinemann Ltd., 1972) p. 3.
- 22) Ibid., p. 5.
- 23) Ibid., p. 14.
- 24) ルナン：『イエス伝』津田 穰訳、p. 147.
- 25) 同書：p. 91.
- 26) 同書：p. 81.
- 27) 同書：p. 371.
- 28) 同書：p. 183.

- 29) D.H. Lawrence: *Apocalypse* (W. Heinemann Ltd., 1972) p. 84.
- 30) Ibid., p. 103.
- 31) Ibid., pp. 103-104.
- 32) Ibid., p. 104.
- 33) Horace Gregory: *D.H. Lawrence: Pilgrim of the Apocalypse* (Grove Press, Inc., 1957) p. 106.
- 34) Alastair Niven: *D.H. Lawrence* (Cambridge Univ. Press, 1978) p. 170.
- 35) Ibid., p. 171.
- 36) D.H. ロレンス: A. ハックスレー編『D.H. ロレンスの手紙』p. 88.
- 37) 同書: p. 135.
- 38) 同書: p. 154.
- 39) 同書: p. 192.
- 40) 同書: p. 197.
- 41) 同書: 同頁.
- 42) 同書: p. 194.
- 43) D.H. Lawrence: *Selected Letters* by Richard Aldington (Penguin Books, 1971) p. 139.
- 44) D.H. Lawrence: A. ハックスレー編『D.H. ロレンスの手紙』p. 264.
- 45) 同書: p. 266.
- 46) 賀川豊彦『聖書の話』(社会思想社、昭和 52 年) p. 154.
- 47) D.H. ロレンス:『恋愛について』=「甦れる主」伊藤 整訳(角川文庫、昭和 48 年) p. 94.
- 48) D.H. Lawrence: *Love Among the Haystacks and other stories* (Penguin Books, 1976) p. 166.
- 49) Chaman Nahal: *D.H. LAWRENCE: An Eastern View* (A.S. Barnes and Company, 1970) p. 216.
- 50) Ibid., p. 219.
- 51) Ibid., p. 224.
- 52) D.H. Lawrence: *The Woman Who Rode Away* (Penguin Books, 1972) p. 192.
- 53) Chaman Nahal: op. Cit., pp. 46-7.
- 54) D.H. Lawrence: *The Woman Who Rode Away* (Penguin Books, 1972) p. 69.
- 55) Ibid., p. 70.
- 56) Keith Sagar: *The Art of D.H. Lawrence* (Cambridge Univ. Press, 1961) p. 67.
- 57) Alastair Niven: op. Cit., pp. 113-4.

テ ク ス ト

- D.H. Lawrence: *APOCALYPSE* (W. Heinemann Ltd., 1972).
- D.H. Lawrence: *THE PLUMED SERPENT* (Penguin Books, 1977).
- D.H. Lawrence: *THE RAINBOW* (Penguin Books, 1972).
- D.H. Lawrence: *SONS AND LOVERS* (Penguin Books, 1959).

参 考 文 献

- D.H. ロレンス:『翼ある蛇』上・中・下巻、西村孝次訳(新潮社、昭和 28 年)。
- D.H. ロレンス:『現代人は愛しうるか』——アポカリプス論——、福田恒存訳(筑摩書房、昭和 48 年)。
- A.H. Gomme: *D.H. LAWRENCE* (The Harvester Press, 1978).
- Eugene Goodheart: *The Utopian Vision of D.H. Lawrence* (The Univ. of Chicago Press, 1971).
- Kingsley Widmer: *The Art of Perversity D.H. Lawrence's Shorter Fictions* (Univ. of Washington

Press, 1962).

John Donne: *IVVENILIA* (Theatrum Orbis Terrarum Ltd., Amsterdam 1633).

半田元夫・今野国雄：『キリスト教史Ⅰ』（山川出版社、1977年）。

岸本英夫『宗教学』（大明堂、昭和41年）。

François Mauriac: 『イエスの生涯』 VIE DE JÉSUS 杉 捷夫訳（新潮社、昭和52年）。

Albert Schweitzer: 『イエスの生涯』 Eine Skizze de Lebens Jesu 波木居斉二訳（岩波書店、1976年）。

マルティン・ルター：『キリスト者の自由』 石原 謙訳（岩波書店、1977年）。

Arnold J. Toynbee: *Christianity among the Religions of the World* 『現代宗教の課題』 山口光朔訳（日本YMCA 同盟出版部、昭和35年）。

Blaise Pascal: *Pensées* 『パンセ』 津田 稔訳（新潮社、上・下巻、昭和49年）。

内村鑑三：『内村鑑三著作集』 第十六巻（岩波書店、昭和28年）。

矢内原忠雄：『マルクス主義と基督徒』（新教出版社、昭和24年）。

C.S. ルイス：『キリスト教の核心』 柳生直行訳（キリスト者学生会出版局、昭和38年）。

岸本英夫：『世界の宗教』（大明堂、昭和40年）。

アラン：『神々』 井沢義雄訳（弥生書房、昭和45年）。

ダンテ：『神曲』 地獄篇、寿岳文章（集英社、昭和49年）。

堀 堅士：『仏教とキリスト教』（レグルス文庫、1973年）。

浅野順一：『基督論の諸問題』（創文社、昭和34年）。

幸徳秋水：『基督抹殺論』（五月書房、1949年）。

トルストイ：『光あるうちに光の中を歩め』 米川正夫訳（岩波書店、1976年）。

J. カーマイケル：『キリストはなぜ殺されたか』 西 義之訳（読売新聞社、昭和47年）。

光倉 充：『キリスト教概論』（創文社、昭和47年）。

大木英夫：『終末論』（紀伊国屋書店、1974年）。

渡辺英俊：『キリストへの道』（日本基督教団出版局、1971年）。

久山 康：『キリスト教』（青木書店、1959年）。

William E. Phipps: *Was Jesus Married?* 石川重俊訳（ヨルダン社、1974年）。

関根正雄・新見 宏：『知恵と黙示』（講談社、1974年）。

金子武蔵：『キリスト教』（理想社、昭和43年）。

—昭和53年9月14日—